虎の話

芥川龍之介

師走(しはす)の或夜(よ)、父は五歳になる男の子を抱(だ)き、一しよに炬燵(こたつ)へはひつてゐる。

子　お父さん何(なに)かお話しをして！

父　何(なん)の話？

子　何(なん)でも。……うん、虎のお話が好(い)いや。

父　虎の話？　虎の話は困つたな。

子　よう、虎の話をさあ。

父　虎の話と。……ぢや虎の話をして上げよう。昔、朝鮮のらつぱ卒(そつ)がね、すつかりお酒に酔つ払らつて、山路(やまみち)にぐうぐう寝てゐたとさ。すると顔が濡れるもんだから、何かと思つて目をさますと、いつの間(ま)にか大

きい虎が一匹、尻つ尾の先に水をつけてはらつぱ卒の顔を撫でてゐたとさ。

子　どうして？

父　そりやらつぱ卒が酔つぱらつてゐたから、お酒つ臭い臭ひをなくした上、食べることにしようと思つたのさ。

子　それから？

父　それかららつぱ卒は覚悟をきめて、力一ぱい持つてゐたらつぱを虎のお尻へ突き立てたとさ。虎は痛いのにびつくりして、どんどん町の方へ逃げ出したとさ。

子　死ななかつたの？

父　そのうちに町のまん中へ来ると、とうとうお尻の傷の為に倒れて死んでしまつたとさ。けれどもお尻に立つてゐたらつぱは虎の死んでしまふまで、ぶうぶう鳴りつづけに鳴つてゐたとさ。

子　（笑ふ）らつぱ卒は？

父　らつぱ卒は大へん褒められて虎退治の御褒美（ごはうび）を貰つたつて……さあ、それでおしまひだよ。

子　いやだ。何かもう一つ。

父　今度は虎の話ぢやないよ。

子　ううん、今度も虎のお話をして。

父　そんなに虎の話ばかりありやしない。ええと、何かなかつたかな？……ああ、ぢやもう一つして上げよう。これも朝鮮の猟師がね、或山奥へ狩をしに行つたら、丁度目の下の谷底に虎が一匹歩いてゐたとさ。

子　大きい虎？

父　うん、大きい虎がね。猟師は好い獲物だと思つて早速鉄砲へ玉をこめたとさ。

子　打つたの？

父　ところが打たうとした時にね、虎はいきなり身をちぢめたと思ふと、向うの大岩に飛びあがつたとさ。けれども宙へ躍り上つたぎり、生憎大岩へとどかない

うちに地びたへ落ちてしまつたとさ。

子　それから？

父　それから虎はもう一度もとの処へ帰つて来た上、又大岩へ飛びかかつたとさ。

子　今度はうまく飛びついた？

父　今度もまた落ちてしまつたとさ。　すると如何(いか)にも羞(はづか)しさうに長い尻(し)つ尾(ぽ)を垂らしたなり、何処(どこ)かへ行つてしまつたとさ。

子　ぢや虎は打たなかつたの？

父　うん、あんまりその容子(ようす)が人間のやうに見えたもんだから、可哀(かはい)さうになつてよしてしまつたつて。

子　つまらないなあ、そんなお話。何かもう一つ虎のお話をして。

父　もう一つ？　今度は猫の話をしよう。長靴をはいた猫の話を。

子　ううん、もう一つ虎のお話をして。

父　仕かたがないな。……ぢや昔大きい虎がね。子虎を三匹持つてゐたとさ。虎はいつも日暮になると三匹の子虎と遊んでゐたとさ。それから夜（よる）は洞穴（ほらあな）へはひつて三匹の子虎と一しよに寝たとさ。……おい、寝ちまつちやいけないよ。

子　（眠むさうに）うん。

父　ところが或秋の日の暮、虎は猟師の矢を受けて、死なないばかりになつて帰つて来たとさ。何(なん)にも知らない三匹の子虎は直(すぐ)に虎にじやれついたとさ。すると虎はいつものやうに躍つたり跳(はね)たりして遊んだとさ。それから又夜もいつものやうに洞穴へはひつて一しよに寝たとさ。けれども夜明けになつて見ると、虎は、いつか三匹の子虎のまん中へはひつて死んでゐたとさ。子虎は皆驚いて、……おい、おきてゐるかい？

子　（寝入つて答へをしない）……

父　おい、誰かゐないか？　こいつはもう寝てしまつたよ。

遠くで「はい、唯今」といふ返事が聞える。

（大正十四年十二月）

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社
　　１９６５（昭和40）年12月20日発行
※底本の「護物」「子　それから／父　それから虎は…」「何処（どこ）かへ行つてしまつたとさ」はそれぞれ、「獲物」「子　それから？／父　それから虎は…」「何処（どこ）かへ行つてしまつたとさ。」にあらためました。
※疑問点の確認にあたっては、「芥川龍之介全集　第十三巻」岩波書店、１９９６（平成８）年11月８日発行を参照しました。
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり

１９９９年１月27日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。